

T 雄 の 入 園

— 母親の記録より —



入 園 準 備

本格的な入園への準備を始めたのは、入園式の二週間前である。

そ の 一

まず起床時間である。

T 雄は朝、九時に起きていたので、朝、七時半に起きることにした。

三月二十二日、今まで使わないうであった、オルゴール時計を出して来た。

T 雄「それなに」

母「時間をあわせておくと、オルゴールがなるのよ。」

T 雄「そんなの家にあつたの。」

母「ええ、T 雄ちゃんのお誕生祝いにいただいたのよ。赤ちゃんの時は使っていたけどもう使わなくなったから、しまっておいたの、動かかしら？」

T 雄「何にするの」

母「もう、十六ほど寝ると、幼稚園なのよ。だから、これを七時半にかけておいて、あしたから、これがなつたら、お兄ちゃんはおきるのよ。」

T 雄「フフフ」

母「もし、これでおきなかつたら『幼稚園におくれますよ』っておこしてあげるわね。」

T 雄「ウン。もう幼稚園にほんどに行くみたいだね。」

夜。時計が八時になったら、T 雄が

「どれ、寝ましようか」と台所の方へ行く。みていると、台所の戸棚の上においてあつたオルゴール時計をもって来て自分の枕元におき、パジャマをきかえはじめた。

初めての日は、長い習慣で、なかなか眠れなく一時間くらい目をあいていたようであった。

そ の 二

T雄のコーナー。

幼稚園に通うようになったら、洋服やら、カバンをかけるT雄の場所がなくてはならない。

そう思って家の中を眺めてみても、狭い家の中はギッシリで絶対余地がない。

現在のオモチャを入れている三尺の押入れの下段をそれに当てることにした。

今までオモチャが入っていたので壁はきれいに張ってある。主人がひとりである頃つかっていた座りつくえを入れた。両側の壁に、洋服、帽子、カバンをかけた。机の上に、本を立て、クマの子のぬいぐるみをかざった。

T雄はよろこんで中に入ったまま出てこない。

中で絵をかいたり、本をよんだりしているらしい。

父と母が、

「もう少ししたら、中に電気をつけてあげるから、まだ、絵を書いたり、本をよんだりしちゃいけませんよ。」

といつても

「だって……」

「それじゃあ、こうやってふすまをあけておけば。」

「いや、いや、しめておいて。」

「目をわるくするよ、T雄。」

父と、母が、用事で台所に行ったら、

「お母さん、ごはんになったらよんでね」

と、押入れの中から声がする。

そつと、母が行って上からあけてみたら、押入れの中に寝ころがって、ふすまのきれたところから、こちらの部屋の方をのぞいていた。

その三

買物。

母は赤ちゃんがいるので行かれないので、父につれられてデパートに行くことになった。

幼稚園のカバンは二年ほど前に誕生祝いにいただいたのがある。今はビニールでボックス型のはやっているようだ。T雄のは布で、ひらべったく、おべんとう箱、おかず入れ、ゆのみ、はしばこ、と全部を入れるのにやや頭を使わなくてはならないが、そういうこともいい事だと思つて、新しく買わないことにした。

傘は黄色の木綿、上ばき・運動ぐつ二足も近くの店で買った。

デパートで買うのは、おべんとう箱、ゆのみ、エプロンの布地、おべんとう袋や、ナフキンを作る布、である。

エプロンには白地に薄色の縞、——ワイシャツにするような——。おべんとう袋などには「オックスフォード」とたのんだので心配ないが、たのしみは、おべんとう箱である。

どんなのを買ってくるやら。

青色のかな。フタに野球選手がついているかな。イヤイヤ、もつ

とあどけないクマさんでもついているかも知れない、と考えていた。帰って来た父に、早速ソツときいてみる。

「ピンク、ピンク色のべんとう箱だよ。」
と笑っている。

びっくりした。「へエー。」といたかかったけれど、だまって包み紙をあけた。あけている最中、ニヤニヤしてしまう。

出してみると、ピンク色といっても、薄紫色である。フタには何の絵もない。おかず入れと対になっていて、中におしろう油入れが入っていた。

「T雄にこの中で好きなのにしなさい。といったら、これが一番いいっていうんだよ。」

「青いのもそばにあったの？」

「うん、あったよ。」

母は、T雄が、買いたいといったのを、一言もさしはさまずに買ってやった父に感謝した。

もし、母がついていったらどうだろう。

きつとってしまっただろう。

「そう、それもいいけど、青いのでなくてもいいの？」

そしてお腹の中で考える。皆に女の子みたいだって笑われないだろうか。男の子が大部分青いおべんとう箱だったら、(近所の金物屋さんできいたら、「男の子さんはみんな青いおべんとう箱です。ねえ、今は色つきでないと出ないんで家では、赤色と、青色と二種類

しかおかないんですよ」といった。) T雄も青いのが良かったといふうんじゃないのだろうか。

薄紫色のおべんとう箱をみていると、始めておべんとうを持って行く子のよろこびとやさしさがそこにあるように思えた。

薄紫色のおべんとう箱を洗うたびに、「お父さんと一しょに買いに行つてよかったな」と思う。

その四

そのほか。

縫いあがったズボンや、エプロンを着せ、カバンをかけさせて、ボウシをかぶせる。

父と母で、

「右向いてみて、後は。もう一度前を向いて ようし、なかなか立派だ。」

「ちょっと首だけ横向いてみて、首が痛くない？」

「今日のお昼はおべんとうにしてあげる。」

「ワイイ」

「おかずなーに」

「ひみつ、作っている間、お台所へ来てはいけませんよ。ちゃんとつくってからみせるわ。」

「ウン。」

ふたをあけて、

「ワー、きれいでどこからたべていいかわからないよ。」

「はしからたべなさい。」

「お家ではそうやってナブキンを首にかけてたべるけど、幼稚園ではどうしたらいいかわからないから、皆さんのするようにしてね。」

「おかずはたべられるけど、ごはん全部食べきれない。」

「おべんとうを持って行くまでに何度もお家でおべんとうにしてあげるから、ごはんもちょうどよくつめられるようになるわ、お母さん初めてだから、多すぎちゃった。のこしていいわよ。」

入園式

父も仕事を午前中休んで入園式に出席するという。妹がいるので母は家にくっついて妹をみるべきかも知れないが、T雄の入園式を母もみたいので家中で出かけることにした。

幼稚園につくと、まだ誰も来ていなかった。T雄は、早速靴をはきかえて、ジャングルジムからすべりだといと、運動場の端から遊びはじめた。

ようやく人々がみえはじめた頃、T雄も胸に校型をした名ふだをつけていただいた。始まる時間になるとお部屋に入った。

おとなしく、机にこしかけているのを見て、急に自分の手元から離れて行ったような感じがする。ガラスごしにT雄をみながら、

父「T雄と目があうと、いけないよ。」

母「わりあいおとなしいわね。」

やがて、父兄は講堂に入るようになった。

母は、ちょっと、T雄に話しかけたくなった。

母「最後の訓示(?)を与えてこなくて大丈夫かしら。」

父「大丈夫だよ。心配ないよ。」

母は、T雄に先生のおっしゃる通りにするのだとか、ひとりほみだしてかけだしたりしてはいけないだとかを一言も朝から話してないのに気がついた。

ガミガミ言わない方がいいのだということは知っている。でも不安である。ひとこといいたい。が父に従って講堂に入った。

入園児の名前が呼ばれた。

園長先生が、壇上でやさしいふくよかなお顔で園児をみていらっしゃる。

お返事の出来る人はお返事をしてくださいと先生がおっしゃったが、初めのうちは誰も返事をしない。誰かひとり、返事をしてくれれば次から返事が出来るのだけれども、と思う。

またもや、母のつまらぬぐち。——朝、お名前をよべたら、返事をするのですよ、と言っておけばよかった。いやいや、返事が出来なくてもいい。かえて言わない方がよかった。いつよばれるかとびくびくするだけだ——。

そのうち、T雄の名前がよべれた。

「ハイ。」

その次から、皆返事をした。中には、ひとりの名前に二人返事をする人までいた。だんだんごやかな雰囲気になって来た。

来賓の祝詞がすみ、在園生のうたとげきがあった。

うたは三つとも知っている歌だし、げきも絵本でおなじみのものだったので、とてもたのしかったらしい。

担任の先生につれられて出て来たT雄に、

「T雄、どうだった。」

と父がきいた。

「おもしろかった。」

といったとたん列からはなれて先生の前までかけ出した。

「お父さん、はなしかけない方がいいのに。」

そういつているうちに、先生になにかいわれて、また元の列にもどった。

あとできくと、

「先生がね、はみださないで、上手に汽車にのってくださいね。」

とおっしゃったの。」

ということである。

お部屋に入って、先生がチューリップの歌をオルガンでひいてくださった。

皆、大きな口で「さいた、さいた」とうたう。

T雄はとみると笑い顔をしているだけであつていない。

二、三度、やってくれたが、一度もうたわなかった。

記念さつえいが終つて、またお部屋に入った。

先生が、御自分のお名前をご紹介になり

「先生のお名前をみんなदैいてみましょう。」

とおっしゃった。皆は、

「ながいせんせい。」

と、元気よくいつたが、T雄はだまつていた。

(帰宅して)

「お母さんね、ぼく、ながい先生、ってはじめて知つたのにね、はなのくみの人みんなしつてたよ。」「どうしてわかつたの。」

「だつてね、皆が一どに大きな声でながい先生っていつたよ。」

父と、母と、T雄と、妹と四人で、家に帰つて来た。

「T雄、よかつたな、今日から幼稚園生だぞ。」

「ほんとによかつた。」

夕方、お祝のお赤飯をお隣りに、とどけにいつた。

「不出来ですけど、ほんの気持だけ。」

「さつきも、おばあちゃまと話してたんだけけど、『待つてた幼稚園でT雄ちゃん嬉しいだらうねえ』というから、『それより、お母さんの方が嬉しそつたつたじゃない?』って笑つたのよ」といわれてしまった。